

『回覧集』の翻刻と分析(二)

—— 綱島梁川による煩悶青年への影響に着目して ——

古 莊 匡 義

凡例

- 以下は、『回覧集』巻五の三三頁～五七頁(一九〇八〔明治四一〕年十月一二日～一二日執筆)における、魚住影雄(折蘆、一八八三～一九一〇)、宮本和吉(一八八三～一九七二)、安倍能成(一八八三～一九六六)、小山朝絵(一八八四～一九七六)の執筆部分の翻刻である。この四名を選択した理由や『回覧集』そのものについての説明は前稿(本紀要第五号所収)を参照のこと。四名の記述は『回覧集』巻四から始まっており、その記述は前稿で翻刻している。
- 誤記や意味が通らない箇所も基本的に原文に忠実に表記した。翻刻者による補足は「」に囲って挿入した。かなづかいが旧かなのままとし、旧字体は新字に改めた。カタカナの助詞(「二」や「ハ」など)はひらがなにした。
- 翻刻者の能力不足で正確に翻刻できていない可能性のある文字には傍線を引き、判読不可能な文字には文字数分と思われるスペースに傍線を引いた。
- は原著者が塗りつぶして判読ができない文字である。また、原著者が削除しているが判読可能な文字は打ち消し線を付加して翻刻した。
- 欄外に原著者が記した内容については、「」で囲って本文中に挿入した。挿入箇所は、原著者が挿入箇所を明確に指示していない場合、欄外の記入位置や原著者の執筆内容をもとに、翻刻者の判断で決定した。
- 原文のページの変わり目を「以上三三頁」などの形で示した。

○可読性を上げるため、適宜全角スペースを挿入した。スペースを挿入した箇所は、原文でも間隔が空いていることが多いが、原文では間隔の空いていないこともある。また、原文で間隔の空いているすべての箇所にスペースを挿入したわけでもない。また、文末と思われる箇所の読点は句点に改めたところがある。

○注の作成や翻刻にあたり、以下を参照した。川合道雄『綱島梁川とその周辺』近代文藝社、一九八九年。日立デジタル平凡社『平凡社日本大百科事典第二版(DVD版)』。日外アソシエーツ編『二〇世紀日本人名事典あ～せ／そ～わ』(全二巻)二〇〇四年。大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』大日本図書、一九九三年。北原保雄編『明鏡国語辞典第二版』大修館書店、二〇一〇年。

「三三」三三八頁 魚住影雄

十月十二日

魚住生

回覧集拝見、とりぐなる諸兄のお説うれし——偽らぬ告白の中に自らの世界を見る様な気がしてよろこばしう御座いました 諸兄の内の一人の慕ひ求めらるゝものはわが求むるものと遠からず諸兄の内の一人の疑問は我疑問である 回覧集を拝見して此度特にうれし——思ひましたことは諸兄の内にわが求むるものと疑ふところのものとが偕に存してゐるといふことをたしかめ得たことでした 当此後も諸兄の

のを拝読することによってわが要求を明かにしわが疑を正さんと欲します

一色兄の姫路の記事⁽¹⁾はなつかしく拝見しました 私は北條口にゐたのでなくて神谷に五六年ゐましたが兄に純粹の故郷である姫路は私の第二の故郷であります 兄の上られし天守閣〔以上三三頁〕には私も二度上りました 兄がながめたまひし書写⁽²⁾の山々には再三再四上りました 殊に北條口には故あつて私とは縁故の深いところであります 又三浦兄⁽³⁾が姫路を第二の故郷とよばるゝこともなつかしく存じます、御推察のごとく私は一時本郷森川町の教会にゐました 今日兄にお目にかゝれば当時のことを思ひ出すかもしれませぬ 今は兄のお姿は全くわかりませぬ、私の姫路及森川町の教会との縁故を申しませうならば、私は生れは姫路の東方八里内外の加古郡の片田舎ですが土地に高等小学校がないので十一の年に母の里である飾磨へ遣られて亀山(御存知でせう)小学校に入られました これが廿六年春のことで廿七年一月に母の生家と共に姫路の神谷橋本町に移りましてやはり亀山に通つてゐましたが廿九年の春から同地中学に入りました 三十二年の春休学〔以上三四頁〕して十二月まで神戸にゐました、翌年春再び姫路に帰つて同年十二月に再び退校して東京に出ました 三十一一年頃から大層内村鑑三先生の著雑誌⁽⁴⁾に動されてゐましたので遂に道を求むる心を起しまして三十四年の三四月の から森川町に宮崎(湖処子)先生⁽⁴⁾の教をうくる様になりました 先生の懇篤なる指導にてバプテスマもうけましたが無事なる一年を経過した後 三十五年の夏以後さまざま懷疑に襲はれました 然し信仰は捨てられませんでしたがとても宮崎先生とお考を共にしてゆくことは出来ませんので除籍を願ひました 卅五年夏以後は海老名先生⁽⁶⁾の教会に出席する様になりましたが入会したのは三十六年木月五月初五日のことで今日までとにかくつゞいてゐます、計らずも姫路の昔、森川町の昔を一色三浦両兄によつて思ひ出させられるのは何となううれしく思ひます

〔以上三五頁〕 三浦兄が姫路を埋骨の地としたいと云はるゝにつけておかしい話だが私はやはり播州で死にたい氣がします 三浦兄が恩師とよばるゝ野口氏⁽⁶⁾の評判はしきりに聞いてゐます、蔭ながら敬意を表してゐます 姫路師範は校長を初めてとして諸先生に立派な人間が多いといふので中々の評判であります 私は播磨の人間でゐて播磨の人間がきらいでわが享けたる中国氣質を呪つてゐます 三浦兄が執着したまふほどに播磨の学生はよろしきにや、——中国氣質と申してはすみませぬ 網島先生然り、山室軍平氏⁽⁷⁾然り大西博士⁽⁸⁾然り 夏は小笠原にゆく筈でしたが参りませんでした、九月上京して後れ利根川の淋しい秋景色をさぐりにまゐりましたゞけです

次の号にはまた何か書かせてゐたゞきませう、一色兄のお説〔以上三六頁〕の中には特に同感のふしもありましたが此度は割愛します。甚だ差出がましい次第ですが中桐様の供養塔⁽⁹⁾はまことに結構と存じます 別によい句はありませぬが追々諸兄の提出されるものがあらうと存じます。西山様の提出なされた三句⁽¹⁰⁾の中 甚だ差出がましい存じますが 私は「何処に行くや」の一句だけは太に賛成致しますが後の二句は少しく露骨にすぎてはゐませんか、又「何処に」は「何処へ」とするのが文法にかなひませう、西山さんは「何処」■の上に「汝」の字を入れたらどうかと云つてゐられる宇佐美兄が会員数を■極めて自然に加はるのでない限り或範圍内にとゞめたいと御提案なされたのは至極賛成であります 然し当諸兄のお考も承りたく存じますが、が同兄も差支へないといはれましたことでもありまして⁽¹¹⁾本号から私の兄も加入させていたゞきたいと存じますから明石の久代省三君から順路下名へ送つて頂たく存じます〔以上三七頁〕

播磨加古郡母里村 魚住正継

兄自身については自ら語りませうから私から申すまでもありませんが故先生を慕つてゐる一人として、又現代の要求と懷疑とを領分有してゐるものとして、兄が諸君等の告白によつて得ることのいかに多

かるべきやはわかりません 何卒加入させていただく様にお願ひ致します

回覽集

〔三八、四二頁 安倍能成〕

十月十三日

安倍能成

○供養塔御設立の主意は賛成です、併しどふいふ文句をかいたら、いかは別りませぬ、神を信じ人を愛する誠心にうちうちの方が、哀れな浮世の敗亡者の心中に同情せられて、一言いつてやりたいと思はれる様な　厳肅な、慈愛深き痛烈な言葉がほしいと思ひます、

以上三八

○自意識と見神の問題も随分盛な様ですが、私には十分にハッキリした意見がありません、といふのは私は近頃神を思ふといふ様なことは殆ど全くなく、随つて見神の問題の如きは、一つも情意上の痛切な問題になつてこないからであります、西田さんの御話¹²といふのは、つまり自意識を撤すれば、直ちにそこに神が見えるものを、其れが出来ぬために神の見えないとの御考で、実験上の痛切な問題であらうと思ひます 之に対して議せんが為めには、先づ自己に見神の止む能はざる痛切なる要求ありや否やを顧みての後でなければなるまいと思ひます、それで私は今ここに彼此といふことを止め■■■■て更に諸君の御考をきくことにします、

○今の私には、神も阿弥陀仏もありませぬ、私は今は諸君中の異端無信者であることを明言しておきます、それは徒らにかくいつて徒ら
〔以上三九頁〕に諸君の感觸を害するを好むものではありません、唯信仰ある者と諸君から思はれるのが心苦しいからであります、唯私一生の願としては、どうか眞の宗教的生活をやりたい、ないとも思つて居ます、■■■■此の要求■■■■ある者として諸君の御言葉

は私にとって風馬牛の言ではありません、

○故先生についての思出は数々ありますけれども、一つ御話します。私が名古屋から汽車で帰る途中でありました、丁度靖国神社の大祭前で、戦死者の遺族と覺しい地方の淳朴な田夫野傭が一ぱい汽車（に）のつて来て、車の中は一ぱいになつて私も雪隠の側に始終たゝずんで居ました、彼らは皆むきだしの田舎言葉で頻りに話しをして居る、やがて大きな包をといて中からデッカイ握飯を出して皆でわけて食ふ。所がちやうど直ぐ側に東京でもの役人　らしい人と、其妻と其女と〔以上四〇頁〕　おぼしいかはい、十六七の女学生が居ました、此の一家族は向ひ合ひに二つの腰掛を占領して、手荷物などをやつぱり腰掛の上において、すましこんで居ました、所が田舎物（ノブ）の中の連中の中の一人のばあさんが荷物を上へあげて、腰を掛けさせて下さいと辞を低うして願ふたと思ひ給へ、然るにかの婦人は顔をしかめて、こんなに荷物が沢山あるのにとか何とかいつて、あはれなばあさんを坐らせてやりません、そしてかはい、女学生までが顔をしかめて何か小言をいひました、彼らの態度は傲然として恰も自分は貴様たちと別な人間だといふ風です。私は側で見て居て実には腹が立ちました、そして又彼ら田夫野傭の其最愛の子を国の為めといふ名の下に失つて、堪へかねてかめる哀傷をも、倅は靖国神社へ祭られた有り難いものだ位のこと、單純に解決して、いやな顔をもしない　　〔以上四一頁〕　安らかな無邪氣な顔を見ると実に堪へられない、今の所謂政治家などの態度が悪くなつて來ました、

十月十四日

〔四二〕四七頁 宮本和吉〕

宮本和吉

○回覧集二冊とも拝見しました、此の前時は■二冊ともスツカリ通読みませんでした、この度はかなり忠実に読みました、いつも乍ら諸君の神を慕ふ誠意に動かされます、誠に敬服のいたりであります。

○事實をいへば私には現在、諸君のやうに神を思慕する盛んな熱情が起りませんので、どうも諸君のやうな敬虔な方々の間に交つて居てはどうも私の心持が何だか圧おさされるやう■■■■であります。圧おさされるやうな氣持といふのは私も矢張梁川会の一員として諸君のやうなと同じやうな事を言はねばならぬといふやうなボンヤリした苦しさであります。

コンナ心持は故先生の前に出る時に■はいつでも起つたので■何日かソナナ事を先生に話したら先生は只微笑されました、それで私は大変に安い思ひをしたのでした、つまり、かりそめの安を偷んだのでありませう。事実私は今でも神についてソナナ強く思はない事を、よい事とは思ひませんが、併し私は近頃そういう心持ちにならない、なれないのであります。

○其の理由としては■色々のものを数ける事が出来ませうが〔以上四三頁〕其の一つは物を抽象して見るのが私の傾向に因ると思ひます。

どなた様かの説に人生具体説といふのがありました、人生具体、面白
いと思ひます、誠にアトラクティブな言葉言ひ方であります、(人生抽
象といつても颯張栄えない、何だか殆んど意味をなしません、無論人
生抽象など「、」いふ言葉はありませんまいが、一寸思ふところ■では
学者の生活など、それに近いものでありませう、併しまたある意味に
於ては、人生の見方など、各人の人生観など皆人生抽象かも知れませ
ん、——何だか、つまらなくい尻理屈になりました、) 具体といふ意
味の詮索などはやめて、なるほど結局人間は人生の具体に落着かねば
ならぬやうに思はれます。私■■■■■■のいふ意味は心靈上の実

驗、見神の実験などといふやうな事を狙つて云ふ〔以上四四頁〕の
であります。併し私は今の処、まだ自分の■■■■傾向として所謂抽象
が好きです、物の特長や性質を抽き出して（内容の貧弱な、力の弱い
ものになるが）頭に描いてみる事が好きです、魚住兄の知的遊戲で
す。これは多くは経験のインテンシティーの弱い人間、または心情の強
く燃え得ない人間■■■の欠点、処であらうと思ひます。私は常にこれ
を自分の足らぬ処と思ふて居ります。

○理屈の先きに立つ人が、とかく心情の、■こまやかなる経験や、または細かに分化した心情感情を持ちかねるのは通例であります。而して、宗教的生活■や又はこの生活の基礎■、出発点となるものは、■■■■■非常な苦と経験の後に得た■■■豊かなる■■■実験でありませう。併し私は今の処、どうしても理性を重んずる傾向を棄てる事が出来ないであります（理論を先きにする傾向も無論 居ります）。勿論、今でも「理性の第一位」（ ）などいふ事は思つては居り（以上四五頁）ませんが、さらばと云つて 諸君と共に「父よ」南無阿弥陀仏」といふ事も出来ないであります。

○理性について思ひ出すのはメエフィストの「人間に天の[○]光[○]りの影[○]」
 【余白に】影（シャイン、虚影）を与へなかつたならば彼は更によい生活を送り得るであらう。人はこの天の光りの影を理性といふてゐる、そして動物よりも更に動物的ななる事にのみ之を用ゐてゐる」といふ言葉であります。 ■■■■■■ 確かに悪魔の言葉であり

ます、併し我等の理性といふてゐるものを「天の光の影」といふてゐる処が面白い、味があるやうに思ひます、更に想出するのは、故先生や、または大西博士の理性の權威についての御考であります、ハツキリ■■■■今理性についての其の御考へを記憶して居りませんか■■■■こゝで彼は云ふ事を止めますが、とにかく〔以上四六頁〕「理性と情意」の關係問題は非常に私には（少くとも）重大で興味のある問題であります。殊に先生が、「見神の実験」を得られてから如何に、理性

と情意の關係を見られたかといふ事を、先生の思想の変遷、または靈的の實驗から考察して見たら得る処決して少くはあるまいと思ひます。

(十月十七日夜記)

(私から小山兄■に直ぐに渡すつもりでゐたところ、小山兄は用事のため■■■■■、国に帰つて十七日に帰つて来られず、十八日にとつてこの回覽集を■■■■■朝に小山君を訪ねたところまだ帰りません。それで遂ひ私に四日滞在したのです、
宮本生)

○中桐様の供養塔の文句はどうか■■■■■■いてよいか私には分りませぬ。
「何処へ行くや」「吾が父よ」など、面白いやうに思ひます。〔以上四七頁〕

〔四八〜五三頁までの斎藤勇の記述は省略、以下五三頁より〕

〔五三〜五七頁 小山鞆絵〕

小山生

回覽集を拝見して誠になつかしき感に打たれました 血のあるロヂックも超理の信仰の姿も共に、深き尊敬を表せずには居られません ヒルティと云ふ人が「各人の性格には各(々) 神秘の処がある、真正の伝記なるものは不可能なり」と云ふ様な意味のことを云ふて居つた¹⁴と記憶して居ます 他人からは随分閑葛藤と見ゆることも其人自身にとりては血の出る様な痛切の問題であることもありますから一概に理論を斥くる気にはなれません もし同情ある眼を以て見るならば中世の煩鎖神学¹⁵の血のなき遊戯に近きロヂックの中にも痛切なる人間中心の叫びを聞くことが出来るでせう、要は中心の要求にあると思ひます〔以上五三頁〕

○個人格と神との關係は実に重大なる又多くの人にとりて痛切なる問題でありませう、而しこれは實驗に基礎を置く問題であります 安倍君の云はれた如く中心に深き要求ある時に始めて生きた問題となること、思はれます 今の処尤も痛切なる要求となつて居ない(單なる思想上の問題としては別です)ので私は立入つて云ふことは出来ないと思ひます 只大体の上から見ますとこれは東西思想の特色の並べ合せと云ふ様な傾がありますから議論も互に了解の足りない処がありはしないかと思はれます 嘗つて高楠博士¹⁶が「西洋の思想信仰の根底には世界は人のために神が造つたものだ(人間が被造物)」他の生物も人のために存在する(と)云ふ様なほんやりした調子がある(大体に於て)ので肉食とか動物を虐待する云ふことは別に何とも思はない其弊害がわかつて来 其反動として動物虐待に反対する声が盛んになつた、之に反し東洋(主に印度)では六道輪回¹⁷の説もあるし万物互に兄弟なりと云ふ根調(以上五四頁)がある 其極まる所近世に至つて却つて西洋の人本主義の様な考が加はつて来て肉食など何とも思はない様になつて来た 両者は反対の極より互に近(つ)きつ、ある」と云はれたことがあつたがこれは極めて小さき問題に關してでありますが凡ての問題を通じてこれに似た傾向がありはしないかと思はれます、權利思想個人主義等は恐らく純東洋思想にては充分の了解は出来ずまい、ケーベル先生も「翻訳の出来るのは数学の本許りだ」と云はれましたが尤もだと思ひます

仏教的信仰を持つて居らる、方には所謂此の西洋思想のいやな臭が鼻につき基督教の方■は「人」と云ふ感じが乏しいのに物足らぬ処ある」を感じるでせう、互に他になき情調によつて信念が色どられて居るのですから深き了解は困難であります 只大なる天才をまつより外仕方がありますまい 而して之に達する道としては只自己の経験はふかく辿るより外はないと思ひます〔以上五五頁〕 一体異思想異信仰の調和された時は其の光彩と生命とを失ふ恐れがあります、かの儒道釈

を折衷せる採根譚^①に比較的的精彩なく、一齋^②の如き一派の儒者に力あるはこれによるかと思はれます、又啓蒙思想期の常識化の如き要は自己の深き経験を辿らずして他の思想に心を引かれ過ぎるから起るのでありませう」

○私は近頃希臘の文化に興味を感じて来ましたが即ち知識的探究の要求個人格の問題に関しては私の常から思ふて居る所は魚住兄や一色兄の御説に近いと思ひます

シラーの「友情」なる詩の一節に偉大なる創造者は孤独に堪えず彼の恩恵の鏡にと靈魂（人）を造れりと云ふ意味が述べてあります^③

○私は近頃希臘の文化に対する興味がまして来た様に思はれますで一反ひそんな知的探究の要求が割合に多くなつて来ましたがこれと私にある東洋趣味と基〔督〕教的信念とが如何に調和する〔以上五六頁〕か、又は一を排するか自己の実験要求及経験深き人々の指導に待たう^④と思ひます

如何なるものにも恐れざる理性の權威と凡ての理を超えたる信念とは私の二要求であります、さりとてかの「……淋しき所にかくれ、教会の師等の論議をさけ、言語の無益なるを悟り何事をも論ぜざる人は幸なるかな、神の神秘を探らんとせず、其心を神の中に没し琴の如く其現前に歌はんとするものは幸なるかな 神よ汝を理解することの如何に難く汝を愛することの如何に易きよ・」の如き語を聞きては徹底せざる■自己の信念を悲しく思ひます で中村様はまことになつかしき方だと思ひました

○中桐様の供養塔の主旨は賛成です 実に有難く貴き思付だと思ひます、文句は「何処へ行くや」又斎藤君のあげて居らる、様のもの^⑤がよいかと思はれます。（以上五七頁）

注

- (1) 一色義朗（醒川、一八七七―一九一〇）は播州・姫路（現在岡山県

生まれの詩人。一八九五年頃から「文庫」に詩作を発表。一八九九年に受洗。（『二〇世紀日本人名辞典』二四七頁）。「回覧集」巻四の一〇一―一〇三頁に、二十年以上前に離れた郷里の姫路を十年ぶりに訪れ、北条口（一色は「條」ではなく「条」と表記している）の古家や母校に行った際の印象が詳細に記されている。

- (2) 三浦修吾（一八七六―一九二〇）は教育者。福岡県師範学校および東京高等師範英語科卒。鹿児島師範、姫路師範に勤めたのち、一九一七年に上京。成蹊学園機関誌「新教育」主宰。高等師範時代に胃を害し、一九〇八、九年の頃には肺結核も患った（『日本児童文学大事典』および『修吾全集』（隆文館、大正十一年）の野口援太郎（注六を参照）の序文を参照した）。三浦は『回覧集』巻四の二二五頁で、魚住が宮崎湖処子のいた頃の本郷森川町の教会にいたのではないかと尋ねている。また、二二七頁では姫路が第二の故郷であり、姫路で死にたいとも述べている。

- (3) 一八九八（明治三二）年六月に内村鑑三が創刊した『東京独立雑誌』だと思われる。

- (4) 宮崎湖処子（一八六四―一九二二）は明治・大正期の詩人、小説家、評論家。筑前国三奈木村生まれ。東京専門学校在学中にキリスト教に入信。一八八八年民友社に入り、「国民新聞」「国民之友」などに多数の詩、小説、評論を発表。抒情詩人として活躍した。一八九七年に民友社を離れたのちは、独自の伝道活動に力を注ぐ。一九〇一年に本郷森川町教会の牧師となる（『世界大百科事典』）。

- (5) 海老名弾正（一八五六―一九三七）はキリスト教思想家。一九九七年から一九二〇年まで本郷教会の牧師を務める。同志社大学の総長なども歴任（『世界大百科事典』）。網島梁川との関係も深く、海老名の主宰する『新人』に網島は多くの論考を寄稿している。網島の葬儀の司式は海老名が行った。

- (6) 野口援太郎（一八六八―一九四二）は大正・昭和期の教育家、教育運動家。東京高等師範学校文学科卒業。一九〇一年二月に創設された兵庫第二師範学校（八月に兵庫県姫路師範学校に改称）の初代校長を務めた。一九一九年より帝国教育会の専務主事に就任してからは教育

指導者として全国的に活躍した。リベラルな教育実践を展開し、城西学園など、学校の創設にも尽力した(『世界大百科事典』「二〇世紀日本人人名事典」)。

- (7) 山室軍平(一八七二―一九四〇)はキリスト教一派である「救世軍」の日本での発展に貢献した宗教家で、神と人道のための奉仕に徹し、廃娼運動や児童保護などの社会事業にも尽力した人物である(『世界大百科事典』)。綱島と同じく岡山出身である。

- (8) 大西祝(一八六四―一九〇〇)は岡山出身の明治の哲学者。帝国大学卒業後、東京専門学校で哲学や心理学、論理学、倫理学、美学などを教えた。評論の分野でも活躍した(『世界大百科事典』)。坪内逍遙とともに、綱島梁川を指導した人物でもある。

- (9) 『回覧集』巻四の一七九頁以下で中桐確太郎が綱島梁川の供養塔を建立する案を提出し、『回覧集』巻五ではこの供養塔に刻むことばを考えることが主要な課題となっている。なお、中桐確太郎(一八七二―一九四四)は、綱島と同じく東京専門学校を卒業し、早稲田で倫理学、論理学などを教えていた綱島の盟友。清国浙江師範学堂に招聘され、一九〇八年五月末に出発した。

- (10) 『回覧集』巻五の三三頁で、魚住の前の執筆者である西山庵は「何処にゆくや」「神に帰れ」「神の道を歩むや」の三つを提案している。

- (11) 『回覧集』巻四の一八九―一九〇頁で、『回覧集』の責任編集者である宇佐美英太郎がこのような提案をしている。

- (12) 『回覧集』巻四の六九頁以降で西田天香は自己意識について論じている。なお、西田天香(一八七二―一九六八)は滋賀県長浜生まれの宗教家、社会活動家。「一燈園」を創設し、無所有・懺悔奉仕の実践を貫いた人物である。

- (13) ゲーテ『ファウスト』の中の「天上の序曲」に含まれるメフィストフェレスの言葉。

- (14) カール・ヒルティ(一八三三―一九〇九)は、一方で弁護士やベルン大学の法学教授、代議士などを歴任し、他方でギリシア・ローマの古典に親しみ、三十歳の頃キリスト教を再発見するなかで、『幸福論』や『眠られぬ夜のために』などの倫理的宗教的な著作を生んだ人物である

(『世界大百科事典』)。

- (15) 西洋中世のスコラ学のことを煩瑣哲学と呼ぶことがある。

- (16) 高楠順次郎(一八六六―一九四五)は仏教学において多大な功績を残した研究者。明治期の動物愛護の運動に参画した人物でもある。

- (17) 『菜根譚』は、中国、明末の洪応明(自誠)の語録。儒教を中核に、道教および仏教をも取り入れて、簡潔な文章で処世訓・人生訓を論じている(『世界大百科事典』)。

- (18) 佐藤一斎(一七七二―一八五九)は陽明学からの影響を強く受けた江戸後期の儒者。渡辺華山、山田方谷、佐久間象山、横井小楠、中村正直などの多彩な弟子を輩出した(『世界大百科事典』)。

- (19) 欄外にこの詩のドイツ語原文が引用されているが、文字が薄く、正確な翻刻が困難である。小山の翻訳から推測するに以下のシラーの詩、Die Freundschaft(の一節であると思われる(Friedrich Schiller, Gedichte (Samtliche Werke in zehn Bänden), Berlin, Aufbau-Verlag, 2005, S.116に基づき翻刻した))。

Freundlos war der große Weltmeister,
Fühle Mangel – darum schuf er Geister,

Selbe Spiegel seiner Seligkeit (Schiller)

- (20) 「…に待つ」には、「…を頼りにしてまかせ、…に望みを託す」の意味がある(『明鏡国語辞典』)。

- (21) 斎藤勇は、『回覧集』巻五の四八頁で、「哀む者は福なり」「凡て労れたる者又重きを荷へる者は我に來れ、我爾(なんじがともが)曹を息ませむ」「御足のあとを踏みて行け」の句を提案している。